

# 社会貢献者表彰とは

国の内外を問わず、社会と人間の安寧と幸福のために貢献し、顕著な功績を挙げられながら、社会的に報われることの少なかった方々を表彰させて頂き、その功績に報い感謝することを通じてよりよい社会づくりに資することを目的とする。

## 第50回社会貢献者表彰の概要

### 【募集告知】

2017年2月より、ダイレクトメール発送、新聞への告知広告、当財団ウェブサイト等にて。

2017年12月から2018年1月31日までウェブサイトにて臨時募集

### 【対象となる功績】

- 人命救助の功績
- 社会貢献の功績

### 【候補者について】

- 候補者には、年齢・職業・性別・信条・国籍等の制限はない。
- 日本で活動する方、もしくは海外で活動する日本人を対象とする。
- 候補者は、同種の功績により当財団の「社会貢献者表彰」を受賞されていない方とする。
- 候補となった功績と同一または同種の功績により、既に国の栄典（叙勲、褒賞）または、大臣表彰等を受賞されている方は、選考の際、後順位とされる。
- 「人命救助の功績」については、原則として、2016年1月1日以降の功績を対象とし、この功績の場合のみ、当該行為により亡くなられた方を含む。

### 【選考について】

選考委員会開催日：2017年6月2日 帝国ホテル東京 157件から25件選出  
2018年2月16日 帝国ホテル東京 45件から15件選出

### 【受賞者】

受賞者：40件（人命救助の功績：11件 社会貢献の功績：29件）

### 【表彰式】

開催日：2018年7月6日 帝国ホテル東京

受賞者には表彰状、副賞として日本財団賞（賞金）を授与する。

# 受賞者手記目次

---

## 【人命救助の功績】

川崎 大輔	032
茨城県立日立商業高等学校	034
故 佐々木 淳	036
辻 慶太	038
櫻田 洋	040
田上 雅喜 清水 虹平 松浦 宏太 弓田 和久	042
石黒 優子 クルス・アイリッシ・リコ カスピリョ・マリセル・カバキット	044
加藤 宙	046
中野 大輔 大芦 正人	048
小畑 省一 小路 義秋	050
馬場 秀樹 柳瀬 一成 杉本 匡史	052

## 【社会貢献の功績】

特定非営利活動法人 アジア眼科医療協力会	056
村井 俊治	058
特定非営利活動法人 ふじみの国際交流センター	060
うえるかむはうす	062
学校法人 カンティニーニョ学園 虹の架け橋教室	064
青木 義道	066
社会福祉法人 一粒会 母子生活支援施設 FAH こすもす	068
広瀬 紀子	070
社会福祉法人 日本介助犬協会	072
Kyawt Kyawt Khine (チヨ チヨ カイ)	074

渋谷 りつ子	076
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima	078
特定非営利活動法人 アジアの障害者活動を支援する会 (ADDP)	080
シスター白幡 和子 シスター吉田 富美子	082
富田 江里子	084
山勢 拓弥	086
NPO 法人 沖縄県自立生活センター・イルカ	088
北洋建設株式会社	090
登校拒否を考える親と子の会・ブルースカイ	092
認定 NPO 法人「だいじょうぶ」	094
公益社団法人 おうみ犯罪被害者支援センター	096
Uday Haribhau Thakar (ウダイ ハリバウ タカール)	098
公益財団法人 真照会	100
一般財団法人 ワンネスグループ	102
鈴木 健大	104
特定非営利活動法人 京都難病連	106
犬飼 公一	108
特定非営利活動法人 精神障害者回復者クラブすみれ会	110
坂本 洋子	112

# 人命救助の功績

---

- ▶海難、水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助、救援に尽くされた功績
- ▶犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- ▶災害、事故、犯罪の発生を未然に防いだ功績

## 川崎 大輔



佐賀県

2016年7月3日、佐賀県佐賀市の「道の駅そよかぜ館」に隣接するBBQ会場に来ていた川崎さんは、付近を流れる嘉瀬川で子ども2人を抱え、沈みかけている女性を目撃し救助に向かった。川の流力は急で、水嵩は2メートルほどあり、足が着く状態ではなかった。川崎さんは3人を抱きかかえたまま20メートル近く流され、ようやく足が川底へ着き、水の流れに逆らいながら立ち続けた。河原で様子を見ていた人が持ってきたコードを手繰り寄せ、無事に3人を救助した。川崎さんは25歳まで10年間活躍した元力士「成剛」。

2016年7月3日、仕事仲間の家族併せて20名近くで、大和の道雄駅でのバーベキューを昼から始めようと炭に火をつける際、梅雨明けということもあり、なかなか火が付かず、子どもたちがぐずりだしてきたので、息子2人を遊ばせようと川へ降りたが、流れが早く一目で危険を感じた。息子たちが川に入らないように、川に背を向けて石投げなどで遊ばせていた時、周囲から突然大きな叫び声が聞こえ、川の方を振り向いたら、母親が子ども2人を抱え沈みかけている姿が目に入り、咄嗟に「助けないと」と思い、息子2人に「来るな！」と叫び、一目散に母子の元に飛び込み3人を両手に抱えこんだ。

川の流力が早く、川底に足が全く着かず、何もできない状態になり、後ろ向きの格好で20メートル位流された時、1～2メートル位の落下がある場所を後ろ向きで一回転してしまい上下の区別が一瞬つかなくなった。川の外に顔を出すのが精一杯のなか、子どもを助けようと必死になっている母親の顔が目に入り、ここで諦めたら誰がこの子たちを助けられるのかと思い、「俺しかいないだろう」と発破をかけ、力が湧き出て無我夢中でもがきだした時、足の裏に固い物が当たった気がした。そこは岩がごろごろしている場所だった。ここでしか助からないと思い、必死で足場を探した。その時、右足が岩場のくぼみに触れた。ここだと気持ちを奮い立たせ、相撲でよく稽古した胸出しの形になれた。運良く踏ん張れる形に慣れたが、川の流れに逆らい踏ん張るのが精一杯の状況で、諦めてしまいそうになったが、母親が子どもに「頑張れ、頑張れ」と声を掛けるのが聞こえ、それが力士時代の応援にも似た気持ちにさせた。

ここで諦めたら死ぬと心に言い聞かせ、まさに土俵際、力士時代にも経験しなかった力が出せた。しかし体力の限界が近づいているのがわかる頃、周りに目をやると、ギャラリーが目に入った。大きな声で「ロープ！ ロープ投げて！」といったが都合よくロープは無く、道の駅で使用されている延長コードを2本結んだのを投げでもら

い、左手でたぐり寄せたが引っ張ってもらえず、時間だけが過ぎてゆき、体力が限界だったので、せっかく見つけた足場を捨て、延長コードを命綱にして一步一步川岸までよじ登り、何とか助け出すことができた。

母子には怪我もなく安心し、息子たちの所へ戻ったら楽しく石投げをしている姿を見てほっとしたことが一番印象に残っている。

川で救助をした際、車の鍵などが流されてしまい、留守番していた妻に電話して状況を話し迎えに来てといった時「バカじゃない！ 子どもに何かあったらどうするの」と鬼のように怒られた。

しかし、この時自分が咄嗟に取った行動をととても誇りに思っている。あの時行かなかったら後悔していただろうと、自分を誉めてやりたい。

また、川の事故が多い中、まさに死というのを間近で経験し、危険な事をしたが、今後もこのような事に遭遇したのなら、自分はまた行くのだろうと思います。

最後に、こういうことは危険ですので絶対にやめて下さい。何か他の方法を探してくださいと言っても、行く人は行く、行かない人は行かないと思いますので、こういった状況をつくらぬ様に親は子どもから目を離さない！ 子どもは親の言うことをキチンと聞く！ これだけは守ってもらいたいですね。



▲本場所取組中



▲断髪式前 北陣親方（元麒麟児）



▲引退 断髪式



▲息子さんたちと



## 茨城県立日立商業高等学校



校長  
鈴木 正人

茨城県

2017年1月17日午前10時35分頃、茨城県立日立商業高等学校敷地に隣接する、JR東日本が管理する線路の脇法面で、枯れ草約290㎡が燃える火災が発生した。付近にいた同校の教諭が火災に気付き、生徒と共に体育館に設置されている消火栓ホースを伸ばし放水した。また校内の消火器を集めたり、バケツリレーをして初期消火に貢献し、校舎や周囲への延焼拡大を防いだ。

(推薦者：日立市長 小川 春樹)

○3年1組 橋本健吾 (野球部)

自分で「よくやったな」と思う。少し驚きと恐怖心はあったが、打球を追うかのごとく体が勝手に反応してくれた。被害が少なく本当に良かったと同時に、仲間と協力し、何かをする大切さを学べて良かった。

○3年2組 宮永悠生 (野球部)

自分はバケツで水を運び、ただ火を消すことだけを考えました。当時の自分は、火が上がったときに無意識に火を消しに行くことだけを考えました。無事に誰ひとり怪我もなく、学校の中にも被害がなくて良かったです。

○3年2組 大下裕二 (ソフトテニス部)

初めて目の前で起きた火災に怖さもありましたが、被害がもっと大きくなってしまおうと大変であると考え、体が勝手に動きました。そこで消火栓を引っ張り、消火活動を進んでおこなうことができました。

○3年4組 佐藤寛太 (サッカー部)

当時を振り返ってみると、とても怖かったです。その火は自分の身長を遥かに超えるもので、「早く消さない」と思い、体が勝手に動いたことを覚えています。

またこのようなことが起きたら、同じような行動をしたいと思います

○3年5組 松丸晃太 (野球部)

高校1年の時火災が起き、私はバケツリレーで火を消すことができました。この火

事で校舎に火が移らなくて、とても良かったです。この経験をこれからも生かしたいです。

○3年5組 鈴木 翔 (ソフトテニス部)

先生たちも消火する中、火がさらに高くなっていき、正直恐怖心はあったが、自分がやらなくてはと思い、消火栓からホースを延ばし、消火活動をおこなった。二次被害もなく、良かったと思った。

○教諭 中口 直仁

当時は、いろいろな偶然が重なって被害が最小限に抑えられたと思います。乾燥した時期で風も強く、枯れ草が広がっている場所なので、大惨事にならなくて良かったと思います。これに携わった生徒は躍動していました。

○校長 鈴木 正人

日立市長小川春樹様のご推薦により、このような名誉ある賞をいただき感謝申し上げます。当時1年生だった生徒たちが、職員とともに、安全に配慮しながら臨機応変に対応できたことを誇りに思います。今後ともチーム日商で、社会で役に立つ人間の育成に努めて参ります。ありがとうございました。



▲学校のポスター



▲日立商業高校 感謝状受賞2017年2月



▲消火活動



## 故 佐々木 淳



千葉県

2016年6月11日午後4時頃、千葉県市川市東浜で溺れていた男性を救助しようと海に入り泳いで向かった。一緒に救助に向かった人が男性を引っ張って岸壁に向かい、佐々木さんも戻ろうとしたが、波の勢いに押され戻ることができず海中に沈み、命を落とされた。佐々木さんは、密漁を防ぐための巡回監視を同僚と行っていた。事故現場は前年にも2名が死亡する水難事故が発生した場所。

(推薦者：公益財団法人 警察協会)

### 社会貢献者表彰式典に出席して感じた事

まず、人命救助の功績で自分自身の命も顧みず、救助活動をされたことは、すばらしく凄いことだと思い感動しました。

社会貢献の功績活動について、大勢の方々が努力されていることに無知だったと私自身恥ずかしく思い、これからはこのような活動に対してもっと目を向けて行かなければと感じました。

ネパールを中心としたアジアの貧しい地域で、眼科医療の活動をされている NPO 法人アジア眼科医療協力会は、目の手術を行うなど、素晴らしい活動をされていると思いました。

ピアニストを志し音楽大学卒業後、観光で立ち寄ったマザーテレサの家で重症心身障害児施設ヤンダン・メディカルセンターを訪れて、貧しい子どもたちの世話をしながらボランティア活動をされることにした渋谷りつ子さんは、音楽の道を捨て、子どもたちに無償の愛と人生すべて捧げ、活動されていることに強く胸をうたれ感動しました。

養育が困難な家庭の訪問支援や家に居場所のない子どもたちを預かり、母子の精神的なサポートをされている事、そして里親として子どもたちを養育され日々大変な活動だと思えます。

シエラレオネ西部のルンサに派遣され、幼稚園や小学校で教材が少ない中、習慣の違いに苦勞し家庭訪問など32年間従事されたシスターの活動は凄いことだと感じました。

ナイジェリアなどで若者の技術習得や就労支援、そしてエボラ出血熱の流行時には、命の危険を顧みず食料の配布など行われた活動は凄いことだと思えました。

カンボジアで日本語学校を設立して日本語をボランティアで教え、子どもたちの未

来も見据えた教育をし、日本企業への就職を目指す一方、子どもたちの親が安定した収入を得られるようバナナの木繊維から紙を作ることを思いついた山勢さんは、世界初の水に濡れても破れないバナナペーパーを製造販売していて、素晴らしい活動をされていると思いました。

日本人が異国の地で頑張っている姿は、本当に頭が下がります。

素晴らしい活動をされている方々、ありがとうございます。

佐々木 末子



▲故 佐々木淳さん



▲淳さんの代わりに賞状を受け取る末子さん



▲息子さんに代り式典に出席してくださった末子さん

## 辻 慶太



高知県

2016年10月11日午前10時40分頃、高知県高岡郡の上ノ加江港の防波堤で釣りをしている最中、数メートル離れたところで釣りをしていた男性が約2メートル下の海中に転落しているのに気付き、飛び込んで救助した。一人で引き上げることが出来ず、大声で救助を求め、他の釣り人の手助けによって引き上げられた。救助された男性は消波ブロックで頭を強打し意識を失って海中に沈んでいたため、辻さんが気付かなければ命は危ない状況だった。

(推薦者：公益財団法人 警察協会)

表彰式典での誇らしい思いを胸に、土佐の高知に飛行機で帰ってきた今、我が心にエネルギーとパワーが満ちているのを強く感じます。いわずもがな、授賞式でお会いした方々に大いに刺激を受け、啓発され、バイタリティーを注入していただけたことがその最たる理由です。

私と同じ「人命救助の功績」での表彰の方々とは、身命の危険を冒して、決死の救助活動に無意識の内に飛び込んだ際の状況の過酷さを語り合うことができました。苦難の末に結果的に救命活動に貢献出来た喜びと安堵と、大したことを成し遂げられた誇りを共有でき、お互いの命懸けでの壮挙を称え、手をかたく握り、肩をたたき合いました。

一方、式典で隣合わせになられた、息子さんが救命活動中に命を落とされたお母様。代理で表彰式に出席されている淋しそうなお姿を拝見していると、心中察するにあまりあり、大切な息子さんを失った悲しみや辛さが思い知られて、鼻の奥がツンとして、涙が出そうになりました。

私とて、危うく同じように最愛の母上にこの式典に代理出席してもらおう寸前だったこととあわせて、御母堂様の悲嘆と心痛はいかばかりかと、非常に切なく辛い思いが込み上げるのをとどめることができませんでした。

お悔みやいたわりの言葉掛けを躊躇っていると、同席されていたとある高校の校長先生様が、真心と慈愛に満ちたお話を、言葉を慎重に選ばれつつもお母様にされていたことには頭が下がり、感謝の思いが湧き上がりました。

一方、「社会貢献の功績」での表彰された方々の活動の詳しいビデオ紹介を一件、また一件と拝見する毎に、私の心が啓蒙されていくのを感じました。

皆様の「愛の魂」は海よりも深く、空よりも高いです。そして、活動を打ち上げ花火的な一過性のものでは終わらすことなく、忍耐強く長年にわたって情熱的に継続さ

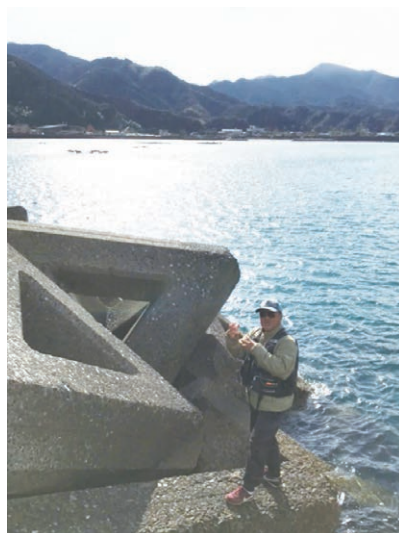


れ、様々な恵まれない境遇の人々のサポートに貢献していかれるエネルギー、パワフルさに敬服いたします。

世の中には、「生き神様」が本当に存在するのだと驚かされます。それに比べて、テレビのニュースも新聞やネットの記事も、どれもこれも殺伐としたものばかり。世の中には悪いことしか起こっていないかのように思われるほど、悪いところ眼鏡で、社会の暗く、不都合な面ばかりをあらさがしして、人の不幸は蜜の味の悪口、陰口、噂話のオンパレード。

そんな世相に抗うかのように、ささやかに、ひそやかに、陰徳を積むかのように社会の片隅で、細々とながらも世のため、人のために全身全霊をかけて尽くされる方々の功績に、スポットライトを当てて顕彰するという「社会貢献支援財団」様の趣旨に、大いに励まされ、勇気づけられ、生きていく希望と勇気と心意気を与えていただきました。

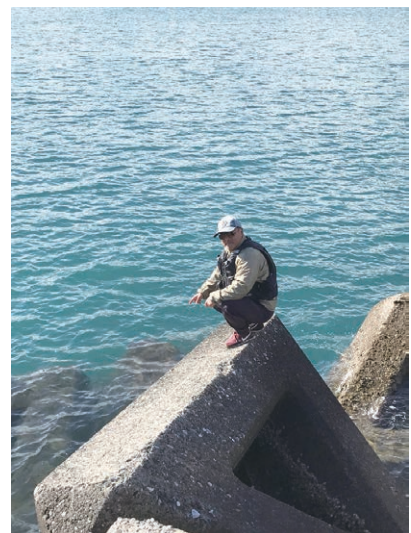
児童・生徒に関わる塾の先生という仕事柄、自分の人間的成長は欠かせません。今回、出会えた数々の方々との交流により、生の触れ合いの中での自己啓発、自己研磨ができました。それを子どもたちに伝え、彼ら彼女らの人柄を磨くことに少しでも寄与、貢献出来たらなと望みます。



▲救助された男性がいた場所



▲いつも身に付けているライフジャケット



▲当日ここで釣りをしていた

## 櫻田 洋



東京都

2017年2月6日午前0時20分頃、東急東横線多摩川駅で終電を逃すまいとしていた櫻田さんは、エスカレーターに乗りホームに差し掛かったときに女性の叫び声を聞いた。何事かと声の方向をみると、男性がホームから線路に落ちる瞬間だった。「ああもう電車が来てしまう！」と櫻田さんが救助に向かおうとすると、叫び声をあげたらしき女性から「待って！ 非常停止ボタン押すから！」と声がかかった。それでも間に合わないと思った櫻田さんは咄嗟に線路に飛び降り、正体無く横たわる男性の体を抱えて回転させ、ホーム下のスペースに何とか移動させた。列車の警笛が鳴り、ライトが光ったので身を縮めていると、ホーム上から「もう大丈夫ですよ」と声が掛かった。櫻田さんは安堵し、「大丈夫ですか？」と男性に声をかけたが、男性は何が起こっていたか理解していない様子だった。列車は数メートル手前で停止していた。

(推薦者：公益財団法人 警察協会)

平成29年2月5日から6日に日付が変わったばかりの深夜0時過ぎ、私は東急多摩川線矢口渡駅から当時住まいの在った東急東横線学芸大学駅に帰宅する為、東急多摩川線多摩川駅での東横線への最終乗り継ぎを経て家路を急いで居りました。

事故が起ったのは多摩川駅の東横線（地上階）ホーム上での事でした。最終乗り継ぎに間に合うようにと小走りで多摩川線（地下階）からエスカレーターで東横線のホームへ急ぎ、エスカレーター上で次発掲示板の「電車がまいります」の文字を確認し一安心してホームに着こうとしていた時、女性の「アッ」という叫びが聞こえ周囲に目を向けた瞬間、一人の男性がまるで夢遊病者のようにホーム下へ転落するところでした。

とっさにこれから電車が入ってくるであろう方へ目を向け、まだ電車が来てないことを確認し線路上へ飛び降りようとした私に「待ってください！ 今、非常ボタンを押しますから」と女性の声がしましたが「それじゃ間に合わない」「電車が来てないからまだ間に合う」と思い、ホームに飛び降りてホーム下の避難場所へ避難させようと男性の体を引っ張りました。

しかし細身の男性ではあるものの無意識で脱力した男性を動かすのは困難を極め四苦八苦している矢先、ホームに突入してくる電車が見えました。このままじゃダメだと思い横たわる男性の背後に回り羽交い絞めの様な形で線路上を転がるように回転し避難場所へ転がり込みましたが、私も男性も体は収まったものの男性の片足だけは収まりきれず線路上に出ている状況でした。私も羽交い絞めにしている状態の中だった為動かせるのは片足のみ、必死で男性の足に自分の足を絡めて引っ張り込もうともがいて居りました。

その時、電車のヘッドライトがハイビームの様なものすごい光で此方を照らし同時に警笛の様な音が鳴り響き、ここまでかと思いきや勢いをつけ最後の1回と思いきや男性の足に今一度自分の足を伸ばし、身を縮めていると暫く経った後、ホーム上から「もう大



丈夫ですよ」との声が、安心して線路上に戻って電車を見ると僅か約5メートル手前に停車しておりました。

ホーム上を見上げると、恐らく非常停止ボタンを押してくれたであろう女性が私のかばんを抱えて立っていました。今振り返ってみると、その女性の冷静な判断により男性も私も命が救われたんだなあ実感しております。

今回の事故に関し各方面の方々からお褒めのお言葉を頂いたり、表彰をして下さったり致しましたが本来は私ではなく、その女性の方こそ表彰に値するべきではないかと考え一度はお断りしたのですが、皆様の説得もあり微力ながら自分の行動も人命救助に値するのだなあと考え、身に余る思いではありますが受賞させていただこうと決心致しました。

今回の事故後、取材を受けたりした際「今後また同じ事が起った場合同じ行動をとりますか?」「同じ状況が起った際その方へ一言」と言った投げかけがありました。

この言葉には私はこう答えようと思います。

私がまた同じ状況に遭遇したなら同じ行動をとると思います。がしかし、他の方への言葉であればやめた方がよいと思います。

と言うのも人命救助は確かに素晴らしい事だとは思いますがそれは救えたから、救助に入った人間も助かったからそう言えるのではないのでしょうか?

今回の表彰者の中にも大切な命を落とされた方がいらっしゃいました。代理でお母様が御出席されておりましたが式典前日の懇親会の際、息子さんのお話・お母様の思いを伺い、胸が締め付けられる気持ちになりました。

事故当日の5メートル手前に緊急停車していた電車を思い出すとゾッとする思いで自分の身に置き換えてみましたが、やはり死んではだめです。

私にも私が死んだら悲しむ人がいると思います、だからこそ皆さんにお伝えしたいのは「出来る範囲で出来ることで行動をとっていただきたい」と言うことです。

最後になりますが、この度はこの様な盛大な式典・祝賀会に列席させていただき心より御礼申し上げます。



▲警察と消防から感謝状を授与されました



▲毎日新聞2017年3月14日

## 田上 雅喜／清水 虹平／松浦 宏太／弓田 和久



## 熊本県

2016年6月29日、熊本県熊本市西区のJR熊本駅で、ホームから線路上に転落して苦しんでいる女性を発見し、数分後に列車が入線してくる状況にも関わらず、田上さんと清水さんがホームに降りて女性を持ち上げ、松浦さんと弓田さんがホーム上で引き上げた。女性は点字ブロックに足を取られて転落した際、第3腰椎を骨折しており、約2カ月の重傷だった。

(推薦者：公益財団法人 警察協会)

この度は、第50回社会貢献表彰式典に御呼びいただき、誠に有難うございました。

私たち4人が高校生時代に行った救助活動が、この様な形で表彰していただけることにとっても驚きました。非常に光栄に思っております。

私は高校生の時には、ラグビー部に所属しておりました。ラグビーの基本精神に「one for all, all for one」という言葉があります。「一人は皆のために、皆は一人のために、自己犠牲を顧みない」という意味の言葉です。ラグビーを通してその精神を学んで来たため、女性がホームの下に転落していることに気づいた時は頭より先に体が動き、4人の力で無事にその女性を助けることができました。私一人の力では、決して助けることはできなかったと思います。

後日、その女性の投稿記事が県内新聞に掲載されました。改めてその方が助かって本当に良かったという気持ちになりました。

表彰式では、様々な社会貢献・人命救助をされた方々のお話しや内容を知り、とても感慨深く素晴らしく思いました。私たちもその中の一員として、この表彰を強く誇りに思っています。これからも人のお役に立てる人間でありたいと思います。

清水 虹平

この度は、第50回社会貢献者表彰式典にお呼びいただき誠にありがとうございました。私たちの些細な行動がこの様な形で大きく表彰されることなど思いもよらない出来事で、初めてお話をいただいたときはとても驚きました。実際に会場に足を運んでみて、私たちの行った行動がとても誇らしいことであるという実感が湧きました。そして、私たちの知らない所でたくさんの人々が人命救助や子どもたちを支援する活動など、様々な形で社会に貢献する活動を行っていることを知りました。

表彰式は、人命救助の功績の部と社会貢献の功績の部がありました。人命救助の功績11件、私たちの様に、駅のホームで救助を行われた方、川で溺れている人を救助された方、暴れている男から女性を助けられた方などがあり、社会貢献の功績29件では、国内に住む外国人の人々を支援する団体や、外国の子どもたちに教育を受ける場を設けるための活動を行っている方などがありました。

私は、この様に多くの方々が素晴らしい活動をされていることを知ることができて本当に

良かったと思います。普段、ニュースや新聞などではこうした活動に触れないので、もっとこんなにも素晴らしい活動を行っている方がたくさんいるという所にも目を向けて欲しいと思います。

このように思うのは、もちろんたくさんの方にこうした活動を知って欲しいという思いもありますが、もう一つ理由があります。それは、人命救助の部で表彰を受けておられた佐々木淳さんです。佐々木さんは溺れていた男性を救助するために海に入り、一緒に救助に向かった人と協力し男性を救助しましたが、波の勢いが強く戻ることができずにその場で命を落とされました。その場所は過去にも水難事故が発生し死亡者が出ている場所だったようです。佐々木さんは密漁を防ぐために巡回監視を行っていた最中に救助活動を行われ命を落としました。この佐々木さんの勇気ある行動で一人の命が救われましたが、過去にも同様の事故が起きている場所であれば、近づかないという意識があってもおかしくはないと思います。新聞やニュースでこういった事故などを扱い、佐々木さんの行動を次の事故が起こらない様に繋げていってほしいと思いました。

私は、今回この表彰式に参加して本当に良かったと思います。その理由が二つあります。まず一つ目は、社会貢献の功績で表彰された山勢さんです。山勢さんは、カンボジアに日本語学校を設立され、日本語を教わる子どもたちの将来の幅を広げたり、バナナの皮から紙をつくることに成功し、製造・販売しスタッフを雇うことで職を生み出すという活動に繋げるなど、カンボジアでとても活躍されている方です。その山勢さんの活動紹介のVTRを拝見し、ある一節が深く印象に残っています。

「自分を持って、自分の決断をする過程を大事にしてほしい」

と山勢さんは話していました。なぜこの一節や印象に残ったかという、私たちは4人で人命救助の活動を行いました。人命救助を行う要因となったのは、人ばかりでした。私は、同じ高校に通う普段から仲の良い友人たちと一緒にだったからこそ人命救助の活動を行うことができたと思っています。もし、同じ状況であの場に1人でいたらと考えると、私も人ばかりの一部だったかもしれないと思います。そこで先ほどの言葉に影響を受けました。自分ひとりでも自分を持って決断したことを大切にやっていきたいと思えるようになりました。この先、人命救助の場面があるとは限りませんが、人命救助の場面以外でもとても大切なことだと思うので、この式典で学んだこの教訓を活かしていきたいと思っています。

そして二つ目が、この表彰式の主催である社会貢献支援財団の安倍会長を少し知ることができたことです。首相夫人にお会いできるだけでもとても光栄で嬉しいことなのですが、それ以上に安倍会長の活動を知ることができて良かったと思っています。首相夫人ということで、お忙しいと思いますが、受賞者のところへ自ら出向き、触れ合い、コミュニケーションを取っておられる姿を拝見し感動しました。表彰式を行うだけではなく、そういった活動を行われることにとっても意味があると思います。受賞者は活動への意欲も増し次の活動への糧となると思います。

私は、今回友人のおかげで表彰式に参加することができましたが、この表彰式で学んだことはたくさんありました。今回、個々で学ばせていただいたことを活かし、日本だけでなく世界が少しでも良くなるように社会に貢献できる活動を行っていききたいと思います。

松浦 宏太



▲女性が転落していた場所



▲左 松浦さん 右 清水さん



▲熊本駅ホーム



## 石黒 優子／クルス アイリッシ リコ／ カスピリョ マリセル カバキット



静岡県

2017年2月28日、静岡県伊豆多賀駅（無人駅）で、石黒さんら3人は、線路に落ちたとみられる男性がホームに手を掛け、頭を覗かせている光景を目にした。3人でホームに男性を引き上げようと試みたが、男性は泥酔していて力を入れることが出来ず、女性の力で引き上げるのは難しかった。数分後には列車が来る状況になったが、どうにか引っ張り上げることが出来た。3人は警察の到着まで泥酔して先の行動が読めない男性を取り囲んで待った。

この度はこのような名誉な賞をいただき、ありがとうございます。また、式典の際には様々な社会貢献をされている方々のお話を伺うことができ、人生においてとても貴重な経験をさせていただきました。

2017年2月28日18時30分頃、仕事を終え伊豆多賀駅まで向かった私たちですが反対側のホームへと渡ろうとしたリッシさん（クルス アイリッシ リコさん）、セルさん（カスピリョ マリセル カバキットさん）の2人が改札を出ようとした瞬間、2人の驚いたような大きな声が聞こえました。2人が私の名前を呼んだと同時に、私の視界に線路で首から上だけ覗かせるお年を召した男性の姿が目に入りました。

私は驚き、すぐに駆け寄りましたが、男性の話す事は聞き取る事ができず、こちらの指示も全く通りませんでした。電車が来る時間が迫っているため、とっさに引っ張り上げようと思いましたか、男性の方に力が入らない事、男性の首までホームの高さがある事で3人では到底引き上げる事は出来ません。

引きあげる事が出来ない為、慌てて『非常停止ボタン』を探すも、無人駅の為かボタンがなく、改札付近にある連絡用の電話にて連絡をしました。連絡後、再度引っ張り上げようとしたのですが、やはり男性の協力が無い事には持ち上げられず、下手に下に降りてしまえば次は自分が上がれなくなってしまうかもしれないとのことで、頭を悩ませていると少し離れた所に足をかけられる様な突起を見つけました。暗かったのですぐに見つける事が出来なかったのですが、後から来た他の女性2名にも手伝って

いただきそこまで誘導しうまく片足をかけていただいた所で一気に引きあげました。引き上げて安心したのもつかの間、泥酔されている様子の男性はまた線路へ降りかねない状態であった為、すぐ後ろの改札を抜け椅子へと座らせ、警察へと連絡しました。そして警察の到着を待ちました。発見して駅に連絡をして警察が到着するまで気が気じゃなく、とても長く感じました。その場には女性しかおらず、男性は泥酔されている様子のため遠巻きに囲んで男性が動き出さないか見ており、警察の方が到着した時にはホッとしました。同時に警察に対して声を荒げたり抵抗している姿を見て、誰も怪我がなくて良かったと安心しました。

まさかこの小さな無人駅で、あのような出来事に遭遇するなど思ってもみなかった為、とても驚きました。電車は30分に1本の無人駅、利用客は少なくその日は近くの高校生も1人もいませんでした。私は電車が到着する音が聞こえるまでホームに行かない為、その日に偶然普段仕事の帰りに電車を利用しないリッシさん、セルさんが駅まで来なければ、きっと発見されなかったと思います。それを思うと、普段テレビのニュースでしか聞かない状態を想像しぞっとしました。偶然が重なり、私たちがやらなければと必死で行った出来事ではありますが、本当に男性が無事で良かったと思います。

3人を代表して 石黒 優子



▲仕事場にて



▲救助現場



▲救助した男性を座らせ警察の到着を待った場所



## 加藤 宙



神奈川県

2016年1月6日の午後5時15分頃、神奈川県横浜市緑区の鶴見川で男児2名が対岸近くで溺れているのを目撃した。加藤さんは服を脱いで30メートル程泳ぎ、パニックになった男児に近づいて落ち着くように言い聞かせながら救助した。対岸はヘドロで滑り、なかなか岸に上げられなかったが、男児1人を自分の肩に載せて浮き上がらせ、岸にいた別の男児に引き上げさせた。もう1人も同じ要領で引き上げさせたが、加藤さん自身は自力で上がるのが難しく、もう一度対岸に泳いで岸に上がった。

授賞式では様々な活動をされている団体、個人の方々と交流させていただき、普段の生活の中では得られない経験をさせていただきました。日常のニュースや新聞で見受けられる内容の話、それに携わる人々の生の声を聞き、感じ入るものがありました。

受賞を受けるまで社会貢献財団の存在、活動をされている方々、団体についても知ることはありませんでした。社会貢献の面において、このような方々を知ってもらい、活動の内容をより多くの人に発信していくことが今後必要であると感じました。

式に参加した後、日常会話の中で受賞された方々の活動内容や式典の内容を少しでも多くの人に知ってもらいたく、話をしています。

私は人命救助で表彰を受けました。川に溺れた2名の少年を助けましたが、救助の際は無我夢中で行動していました。1月の17時30分で対岸は暗くて見えず、少年たちの泣き叫ぶ声だけが聞こえました。警察や消防機関に通報して助けを待つことが一般的であり、社会におけるマニュアルかと思いますが、あの時マニュアル通りに行動していたら2名の少年の命は救われていなかったのかも知れません。

私も無事であったため何事もなく今では生活を送っていますが、ふと考える時があり、当時のことを思い出すと背筋がゾクとする時があります。

色々と思いを考えていくと、事故によって発生したことで救助を行いました。事故を未然に防ぐことこそ救助の本質であると実感しています。

先に述べた団体以外にも、社会には様々な活動をされている方々がいらっしゃるかと推察します。今回の表彰を受け、今後は事故を未然に防ぐ側にフォーカスし、先ずは知ることから始めていきたいと思えます。また、具体的に参加、行動することこそ、より良い社会に貢献する上で最も大切なことであると今回の式で学ばせていただきました。



▲向う側で男児がおぼれていた



▲橋の上は見ている人でいっぱいだった



▲男児を救助した後、自力で岸に上るのが難しく、もう一度泳いで戻り岸に上ることができた

**川で男児を救助  
社員に感謝状**

真冬の川に飛び込んで小学3年の男児(9)を救助したとして、緑署は21日、横浜市青葉区の会社員加藤宙さん(36)に感謝状を贈った。加藤さんは「助けようという一心で、川の冷たさも感じなかった」と無我夢中の救出劇を振り返った。

「助けて」。鶴見川の河川敷(同市緑区鴨居1丁目)を同僚と歩いていた加藤さんが、叫び声を聞いたのは6日午後5時15分ごろ。すでに周囲は暗かったが、即座に「自分が助けるしかない」と決断。服を脱いで川に飛び込んだ。

男児の気配を頼りに対岸近くまで約30分泳ぎ、水面に顔だけ出しておぼれている男児を発見。肩に乗せ、岸に引き揚げた。加藤さんは足裏を負傷していた。

現場の水深は男児の脚が届かない1・5メートル。清水昭

緑 署

清水署長から感謝状を受け取る加藤さん

川緑署

人署長は「勇気に敬服する」とあらためて感謝。一児の父でもある加藤さんは「子どもにけががなくて良かった」と笑顔を見せた。

(竹内 瑠梨)

## 中野 大輔／大芦 正人



岩手県

2016年8月30日20時30分頃、台風10号の大雨により岩手県久慈市内近くを流れる長内川と久慈川にかかる橋に流木がかかり、流れがせき止められ川が氾濫し市内に浸水、久慈駅前も2メートル近くの水位になった。中野氏と大芦氏は泳いで避難する途中、2階部分に上がろうとしたアパートの1階の部屋で逃げ遅れた60代の男性を発見、2人でその男性を引っ張り出して救助した。

台風10号が来ている、というあの日。普段通り職場に向かった。台風や洪水があっても浸水する場所は大抵いつもと同じ場所なので気にもしていなかった。

仕事中に職場の入り口の自動ドアのガラスが割れて水が入って来て、店内の掘りごたつの下の方からも水が入って来て、腰の高さまで浸水するまでたったの10分から15分。店の表側は流れが早く出られないと判断し、裏の窓から脱出した。

扉を乗り越え渡ったが途中で足がつかないほどの水位になってしまったため、近所のアパートの2階に逃げ込んだ。辺りは暗く、逃げている最中は不安しかなかった。

とにかく必死で泳ぎ、アパートに辿り着いた。着いてすぐ。休む間もなく、1階からドンドンと扉をたたき音がして、「誰かがいるのだ!」と思い、慌てて大芦さんと飛び込んだ。1階にいたその人は首まで水に浸かり、動けない様子だった。水圧で扉はあかないため、大芦さんに電灯を照らしてもらい、キッチンに回り込んで窓の鍵を何とかして開けてもらい、その人を引っ張り出して助けた。

3人で何とか2階に上がり着いた。逃げられたことで不安は少し解消された。しかし、服が濡れた状態で、寒さと空腹から安心はできず、眠れず、携帯電話の充電も少なく、情報も入ってこないのが、車は大丈夫なのか、家は大丈夫なのか、家族は大丈夫なのか…不安は尽きなかった。

いつ帰れるかもわからない状態の中で、その2階の住人の方がお茶と着替えを出してくれた。さらには向かいが自宅の仕事の取引先の方が布団を渡してくれ、その布団をベランダに置いて、避難をしていた計6名でそこに明け方までじっとしていた。

朝6時頃、妻から電話があり、状況を伝え、消防に連絡をするよう伝えた。しかし、怪我人やお年寄り、子どもがいなければ後回しになると言われた。

救助した人が怪我を負っていたが、充電がなかったため上手く連絡のやり取りができなかった。市役所も消防も助けに来ないので、朝10時過ぎにあご位まで水が引いた



時、このくらいなら自力で行けると判断し、職場の上司と大芦さんと3人で泳いで道路までたどり着いた。残りの3人はその直後に救助されたと後から聞いた。

まさかここまでの状況になるとは、と思ったし、必死に逃げている状況ではあったが、誰かが危険な状態だと分かると無意識のうちに助けなければ、と咄嗟の判断で体が動いた。

自分たちがその人の信号に気づけて良かったと思う。大変な経験ではあったが、その一方でこういった賞を受賞できた事を大変光栄に思う。

中野 大輔

この度、公益財団法人社会貢献支援財団主催による第50回社会貢献者表彰式典におきまして、荣誉ある賞を賜り誠にありがとうございました。

当日は、台風10号の大雨により、私の勤めている飲食店のある地域は2メートル近くの水位になりました。私たちも泳いでアパートの2階部分に避難したところ、下から物音がして、もう一度潜り1階の部屋を確認すると逃げ遅れて溺れている男性を発見しました。救助の最中は無我夢中で考えるより先に体が動いていた感じだと思います。

表彰式では、世界で社会貢献されている方の姿や話を聞くことができ、大変感動しました。今回の表彰式に参加させていただいてなければこのような素晴らしい活動をずっと知らずに過ごしていたと思います。今回の事で自分自身気づかされることも多く、また刺激を受けることができました。

今回の賞に選んでいただき参加できたことは、私の人生の中でも一番の誇りになると思います。今後、この賞に恥じることはないよう、また社会貢献できるよう生きていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

大芦 正人



▲このアパートの1階から男性を救助し2階の通路に避難した



▲久慈駅西口方面は一面水浸しとなった

## 小畑 省一／小路 義秋



岩手県

2016年8月30日20時頃、台風10号の大雨により、岩手県久慈市大川目町滝集落の近くを流れる長内川の氾濫と停電により民家が孤立する中で、小畑氏と小路氏は、濁流・流木の中を胸まで浸かりながら一人暮らしの高齢者宅を回り、状況に応じてロープやはしごを使ったり、背負うなどをして3人を救出するとともに3人を避難誘導し、救出した。

東北の太平洋側から台風10号が初上陸する可能性が大きくなり、前夜から続く大雨が午後5時頃には小康状態となったので、心のどこかにちょっと安堵の気持ちで夕食を取っていると停電しました。携帯型電灯とろうそくで光を確保しました。

直後、ドンドンと玄関ドアを叩く音と屋外から電灯を照らす光が見え、とっさに「何かが？」と胸騒ぎし玄関に走って行きました。

地域は東西南北が小高い山に囲まれ、夜は星空がくっきり美しく観察でき、世帯数約40余り、地域の中央を水深50cm 川幅15m 程の長内川が流れるのどかな限界集落で、停電の暗闇ではライトがないと周辺が何も確認できません。

玄関に知人が雨合羽と懐中電灯を手にやや興奮状態で現れ「河川近くのOさん宅が1m以上の濁流に囲まれている」と言うので、準備していた雨合羽を着てヘッドランプを装着して外に飛び出しました。

30m程歩くと、夕刻には水深が4m程だった川がゆうに10mに増水し、川幅は15mから50m程に拡がり、真っ黒く勢いのある濁流と根こそぎされた10m以上もある流木が見えました。激しい金属音や木材の鈍く追突する音が聞こえ、緊張感や悪寒を感じ恐怖を覚えました。

私はちょっとの間があってから、犠牲者を出してはいけないとの思いで、同行していた妻に、足に障害がある90歳のお婆さんを自宅に誘導するよう依頼し、小路氏と合流して1m以上の濁流に囲まれていたOさん宅へ向かいました。Oさんからはこのまま自宅に留まりたいとお話も有りましたが「命」あってだからと伝え、2階に梯子を掛け脱出してもらいました。後日、お婆さんからお礼の言葉と濁流を見た恐怖や梯子の強度への不安を聞き、心に寄り添えなかったと反省もしました。

次いで、遠方で数名がライトを照らす様子が見え、厳しい状況判断でしたが小路氏が命綱で安全を確保し、緊急対応を依頼、連携しながら激流を20m横断して救出に



成功しました。

直後、1.5m 程の濁流に囲まれた平屋建てに「お婆さんが居るはず」の声が上がり、近くの電柱にロープを結び、自宅裏の窓から脱出させロープで背負い濁流と軟弱な畑地を一步一步進み無事救出しました。地域の2 / 3が水害による被害を受けながらも人的被害がなかったことに翌日安堵しました。

人命救助の功績の問合わせを頂いた時、地域で子どもの頃から見守られ育てられた思いと、数年前にUターンした小路さんと私は、「少しは地域に役立ったのかも」と考え、甚だ恐縮なお話だと思いました。

表彰式典では人命救助の受賞の方々の多くは家族とともに出席されており、理解され支えられている様子を感じ嬉しく思いました。皆さんの決断が素晴らしく、行動に感銘を受けました。

社会貢献での受賞の方々の長きボランティア活動や国内だけでなく国外の人々のため、それぞれの人生をかけた活動に心から敬意と感謝を申し上げます。ご功績の内容を伺い感銘を受けることばかりで勉強させていただきました。これからは皆さんの活動や取組みを今後の生活、人生で係わる機会において多くの人に伝えることができたらと心に誓いました。



▲翌日の被害状況。橋の上に水流と流木が確認できる



▲19時30分頃濁流に囲まれていた一人暮らしの81歳の女性をはしごを使って2階から救出した



▲右側は小路さんの自宅



▲写真中央のオレンジの家屋からひとり暮らしの80歳の女性を救出。付近の茶色の家屋から65歳の女性を救出した

## 馬場 秀樹／柳瀬 一成／杉本 匡史



大阪府

2016年11月2日午後5時20分頃、大阪市 JR 天王寺駅構内を帰宅中の馬場氏と柳瀬氏は JR 天王寺改札方向へ、杉本氏は地下鉄方向へ向かっていたところ、男が金属バットを振り回し、女兒と女性に危害を加えている現場に遭遇し、馬場氏が咄嗟に容疑者に飛びかかり、柳瀬氏と杉本氏も続いて飛びかかり、協力して容疑者の男を取り押さえた。

この度、大変名誉ある賞をいただきましたことに心より御礼を申し上げます。

また、表彰式当日は会長の安倍昭恵様より表彰状を授与頂き誠に光栄に思っております。今回、私は人命救助部門11組のなかの一組として式典に参加させていただきましたが、日本各地のみならず、海外でも多種多様の福祉活動や社会貢献をされている方々がおられることを改めて知り、本当に良い経験と自分も何か出来ないか等と思わされる式典でした。

私事ですが、活動報告ではありませんが、本式典の前日から私たち3人が係わった事件の裁判が始まり、以前より検事の方から参考人として法廷で証言していただきたいとの申し出がありましたので、被害者の方々のことを思い快く承諾し証言して参りました。日本も猟奇的な事件や弱者を狙った凶悪犯罪等が日常的に発生し、必ずしも治安が良い国とは言えなくなってきているように思います。

我々、一般市民は犯罪に対して何か出来る訳ではありませんが、抑止することは可能ではないかと事件以来感じております。今回、参加された皆様方を少しでも見習い、また、応援できる機会があれば是非、参加させていただきたいと思いました。

最後に社会福祉に貢献される方々のご多幸を願い、執筆を終わらせていただきます。

馬場 秀樹

この度は、数多くの候補の中より選出していただき貴重な賞を頂戴致しましたことを心より感謝申し上げます。

改めて事件の事を振り返りますと、当時、私は業務中で上司と天王寺駅で乗り換えるところでした。エスカレーターを上っていると、金属音やざわついた人の声が聞こえてきたので、何かのイベントかと思っていたところ、金属バットを持った男が少女に殴りかかっているのが見えました。周囲にはたくさんの方がいましたが、男を止めることはできずにいました。一瞬の事でありはつきりと覚えていませんが、上司が先に飛び出し、私も一緒に男に飛び掛かりました。他の方の協力もあり、無我夢中で何とか男を取り押さえ、被害の拡大を防ぐことができました。

私は元々正義感が人より強いわけではなく、腕力に自信がある方でもありません。そんな私でも、勇気を出せば誰かの役に立つことがあるのだと驚きました。そして



何より、一人の力は小さくても、複数の力を合わせれば難しそうに思えることも解決できるということを改めて感じました。

昨今、弱者を狙う卑劣な事件をニュースで目にするたびに心が痛みます。また、地震や豪雨など大きな災害も後を絶ちません。以前はどこか他人事のような気がしていた事も、いつ自分の身に起こるか分からないと身に沁みました。これからも、その場の状況を判断しつつ、積極的に困っている人を助けていけるように心掛けたいと思います。そしてこのような人命救助や社会貢献を応援し広げていく貴財団の活動に敬意を表します。ありがとうございました。

柳瀬 一成

この度、第50回社会貢献者表彰という盛大な式典の挙行、荣誉ある賞を賜り誠にありがとうございました。懇親会から授賞式、そして祝賀会を通して多くの素晴らしい方々と出会えたこと、人の温かさに触れることができたのは、私にとって生涯の財産・宝となりました。

さらに、他の人命救助で受賞された方々の身を挺した勇氣ある行動、社会貢献で受賞された方々の長年の地道な活動、世の中には目立つことなく、見えないところで社会に貢献している方々がこんなにもいるんだと…とても感動いたしました。本当に奇跡のような出会い、かけがえのない時間を共有することができました。今後の人生に活かしていきたいと思っています。

平成28年11月2日午後5時過ぎの出来事でした。当日は予定していた会議が長引き、次の仕事へ向かうため、JR 天王寺駅中央コンコースを急ぎ足で歩いていたところ、突然の悲鳴と目を疑うような信じられない光景、若い女性に金属バットを振りかざし、危害を加えている男に遭遇したのです。一度は犯人を見失いましたが、振り返ると次は女兒に殴りかかっていたのです。

体が動いたのは咄嗟の判断でした…通りかかった男性2人に続き犯人に飛び掛かって取り押さえました。

今回の救助は私だけではなく、他の多くの方が関わっています。私達と一緒に犯人を取り押さえて下さった方、駆け付けて下さったJRの職員さんなど。

警察署から感謝状の授与があるとお聞きした時、まだケガ人が回復していない中、躊躇しましたが、最終的に警察の方々から有難いお言葉を頂き、受け取ることにいたしました。

とは言え当初は、もう少し早く動いていれば、ケガ人も抑えられたのではないかと自分を責める時もありました。しかし、今では女性の社会復帰、女兒の回復をお聞きし安堵しております。

事件から1年半ほど経ちました。事件現場には今でも毎日のように仕事で通りかかります。その度にあの時の光景が目目に浮かび、心がざわつきますが、変わらず人々が行き交う平穏な情景に、普通に過ごせる日常の大切さを改めて感じずにはおれません。

安倍昭恵会長はじめ、式典では多くの皆様との交流と見聞を広める機会をいただき、感謝の言葉しかありません、本当にありがとうございました。

杉本 匡史



▲感謝状を授与されました



# 社会貢献の功績

---

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧、幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績



## 特定非営利活動法人 アジア眼科医療協力会



兵庫県

1972年からネパールを中心としてアジアの貧しい地域で眼科医療の活動を行っている NPO 法人。医師が現地に赴き仮設の医療現場等で目の手術を行うアイキャンプの実施、人材育成、新しい医療技術と医療機器の導入、眼科病院の運営・支援を行っている。故黒住医師によって始められた。兵庫県西宮市に拠点を置く。これまでにネパールとインドで1万人以上の人が光を取り戻した。

理事長

黒田 真一郎

「誰もが自分や家族以外の見知らぬ人のために、ひとつだけ思いをかけることができれば、世の中は少しずつ良くなりますね。」当会の創設者のひとりである黒住格は、眼科医であると同時に児童文学作家でもあり、人々に暖かい眼差しを向け続けていました。盲人福祉会の第一人者・岩橋英行が、1971年の正月に新聞掲載された随筆「私の初夢」の中で、「失明発生率が世界で最も高いアジア諸国に日本から医療チームを派遣しては」と提言しました。この提言に黒住が呼応したことから、当会が誕生しました。

世界保健機関によると途上国には失明者が約4千万人います。医療者不足、貧困、交通アクセス不良、知識不足などで眼科医療に辿り着けていません。失明者は家族や社会の負担となり更なる貧困を生む負の連鎖を招くこととなります。失明原因の半数は白内障であり、日本では治療可能な疾患です。

そこで当会では下記のような活動を行ってまいりました。

- ①アイキャンプ：医療過疎地に眼科医療チームが赴き、失明者に白内障手術を施す活動です。ネパールに1972年から2014年まで、インドのチベット難民居住区に2000年から毎年、医療チームを派遣し、累計1万人以上に白内障治療を中心とした手術を無償で施行してきました。
- ②人材育成：途上国の医師や看護師、医療技術者に手術指導や機器管理の実技指導、講義を行ってきました。日本や海外への留学研修を40名以上の医療従事者に提供してきました。また、2007年から3年間、国際協力機構（JICA）と協働で草の根技術協力「ネパールにおける眼科医療システム強化プロジェクト」を行い、ネパール語の眼科教科書を作成し、ネパール全体で眼科医や保健師に眼科基礎教育を行いました。

③眼科病院の支援:1988年に日本人眼科医をネパールのケディア病院に長期派遣して、病院の運営や支援活動を行いました。1997年にはネパールでも最貧地区であるゴールに24時間テレビチャリティ委員会と協働でゴール眼科病院を建設して眼科医療だけでなく、病院運営面でも関わり自立まで支援をしました。現在ではケディアとゴールの両病院で年間1万5千件を超える手術を行うまでになりました。

④医療機器の寄贈:眼科検査機器、白内障手術装置、レーザー治療装置などを必要とするネパールやインドの病院に寄贈しました。

当会は、ボランティアという言葉が一般的でなかった半世紀近く前に生まれ、黒住の「もし自分があの国に生まれていれば」という姿勢は、共鳴する会員に世代を超えて受け継がれています。時代の趨勢でODAとNGOの担うフィールドは接近してきていますが、ODAで賄われない隙間を埋める活動も必要です。この度は、受賞の榮譽に浴し身に余る光栄に存じます。今回の受賞を機に今後も身を引き締め、途上地域の失明減少を目的とし、当会の精神を若い世代に引き継ぎつつ、地道ながらも活動を継続していきます。

アジア眼科医療協力会 一同



▲AOCA創始者の1人である故黒住格眼科医の名を冠した黒住格基金にて2005年に開校したドラカ郡にあるゴールジャンカール大学



▲ゴール眼科病院での眼科医療指導と医療活動の様子



▲1997年～2007年までネパールのドラカ郡チャリコットで行ったアイキャンプ活動の様子



▲2000年から行っているインド西北部のチベット難民居住区ダラムサラでのアイキャンプ活動の様子

## 村井 俊治



東京大学名誉教授、  
リグリーンムーブメント代表

東京都

地球観測衛星からの情報をもとにしたリモートセンシングが専門。東京大学名誉教授。日本への木材輸出と焼き畑農業でタイの熱帯林が激減しているのを衛星画像から知り衝撃を受けた。交流のあったタイ王室のシリントーン王女も熱帯林の激減を憂いており、王女自らかかわっているプリンセスプロジェクトの一環として「リグリーンムーブメントRGM」が1991年に認められた。

土地に昔からある樹木の種を採取して苗を育て、数種類の苗を混植する生態学的アプローチで環境保全林を育成するための植林をしている。当初、個人からの寄付で賄った。毎年、雨季の始まる6月初旬に日本人ボランティアと植栽地の村民や小中学生、国境警備隊員など平均500人で植林している。今年で27年目。最初のころに植えた地域はすでに熱帯林になっていて、人工衛星から緑が確認できる。

### 熱帯林を再生する運動（RGM）の27年

1991年からタイのシリントーン王女様が推進しておられるプリンセスプロジェクトの管轄に、熱帯林を再生する運動（Re-Green Movement:RGM）を認可していただき、毎年生態学的アプローチの植樹祭を企画・実行してきました。日本人の立場はボランティアとして植樹のアドバイザーとしての役割です。植樹は主に国境周辺の熱帯林が破壊された場所で、村人、学校生徒、国境警備隊、森林局などのタイ人約500人と毎年一緒に植樹を続けて来ました。

我々の植林は再び伐採して木材を得るのが目的ではなく、洪水、土壌流出、干ばつ、地下水枯渇などの災害から国土を守る環境保全林を再生するのが目的です。決して再び伐採しない植林です。植樹の方法は、昔からその土地に生育していたネイティブの樹種を15ないし20選び、苗木を育て、1平方メートルに3本から5本と混植・密植します。生態学的に競争と共存を利用して可能な限り早い成長を促すもので、元横浜国立大学におられた宮脇昭先生が開発した植林方法です。

RGMは口コミ以外で宣伝をしたことはないのですが、口コミで知った雑誌社や新聞社が取材をして記事を書いたことがあったことから、社会貢献支援財団が知るころになり、図らずも今回の受賞になりました。早速、タイのプリンセスプロジェクトのオフィスにも受賞のことを報告したところ、シリントーン王女様も喜んでおられるとのことでした。

2011年は日本では東日本大震災が起こって大変な被害に苦しみましたが、タイでは未曾有の大洪水が起き、国民から熱帯林の伐採を放置したからだとの批難が沸き起こり、2015年からタイ政府は本腰を入れて植林事業を推進することになりました。私た



ちが進めてきた生態学的アプローチの植林方法が正式にタイ政府の植林方法として採用されることになりました。黙々と続けてきたRGMが25年後にタイ政府の目に留まることになったことは嬉しいことですし感激をしています。この思いを今回受賞した社会貢献者賞を日本のボランティアとしてタイでの植樹祭に参加してくれた仲間だけでなく、タイのシリントーン王女様を始め多くのタイの人たちと喜びを分かち合いたいと思います。

私は現在78歳ですが、プリンセスプロジェクトに認可された事業は一生続けなければいけないとタイの人に言われております。王女様が日本に来られて帝国ホテルにお泊りした時にランチに招待されたことを思い出しました。帝国ホテルでの受賞式ではシリントーン王女様が見守って喜ばれているような感じがしました。ボランティアの仲間も数人受賞式に参列してくれました。タイ大使館のバンサーン大使も参列してくれました。沢山の方を代表して私が受賞しましたが、地道に愚直にこれからもタイでの植樹を続ける勇気もらいました。

沢山の社会貢献をしている方々にもお会いできました。社会貢献支援財団の素晴らしい支援活動に敬意と感謝の意を述べたいと思います。



▲1991年に植林した森林の前に立つ王女様  
シリントーン王女様は1991年にRGMを認めて下さった



▲タイの現地人と一緒に植林：1993年  
ミャンマー国境に近いラチャブリ県スアンプン：子どもたちと



▲タイ人と一緒に植林：笑顔が美しい



▲王女様にディナーを招待される



▲26年前に植林した森の前で記念撮影：2016年

## 特定非営利活動法人 ふじみの国際交流センター



埼玉県

埼玉県ふじみ野市に拠点を置き、日本に住んでいる外国人の「自立支援と多文化共生」を目的とした交流の場として1997年に発足したNPO法人。理事長の石井ナナエ氏が開いていた外国人向けの日本語教室の生徒たちが、石井さんを慕って教室外でも電話をかけてきたり、相談事を持ちかけて来る事が多く「どこかに場所を作って対応したい」と思ったことが始まりとなった。今では日本人ボランティアスタッフ約40人、外国人スタッフ約30人がおり、外国人の生活相談、数か国語で書かれた生活情報誌の発行配布、日本語教室、外国にルーツを持つ子どもの学習教室、DV被害者母子のシェルター運営と自立支援、パソコン教室、通訳・翻訳事業、国際交流イベントの開催などを行っている。発足から21年目を迎え、かつて支援を受けていた外国人が支援する側となってボランティアに来るなど、成果の見える活動を継続している。

(推薦者：埼玉県県民生活部国際課)

理事長

石井 ナナエ

ありがとうございました。

皆で資金を出し合って家を借り、「多文化が未来を拓く」を合言葉に、日本で暮らす外国人の「自立支援と多文化共生」活動を始めて21年になりました。

毎年600件超寄せられる生活相談に対応し、7カ国語で発信する生活情報誌は228号になりました。日本語教室や子供の学習支援に参加した受講生は延べ4万5千人を超えました。他にも日本人と外国人が協力して翻訳・通訳、交流サロンの開催、料理教室、パソコン教室、DV被害母子の為のシェルターの運営をしています。

この度の授賞式では、晴れやかな舞台で盛大に祝福していただいている現実に戸惑いながらも、心の底から喜びを感じ、泣きそうになるのをこらえるのに必死でした。参加させていただいたスタッフ12人と推薦して下さった埼玉県国際課の職員の方々も、帝国ホテルでの豪華なご馳走と、社会貢献支援財団の皆様の温かい対応に接して大感激していました。

選考委員の方々にお会いできなかったのは残念でしたが、その代わりに安倍会長が気軽に写真撮影に応じて下さり、即座に母国に転送し「親孝行ができた」と喜ぶ外国人スタッフもいました。

70歳にして身に余る体験をさせていただいた私ですが、社会貢献支援財団様、日本財団様に心から御礼申し上げ、このような体験ができたのも「毎日心を一にして活動してくれる素敵な仲間がいたからこそ」と、改めて大勢の良い仲間巡りに巡り会えたことに感謝しました。

2日間で一番印象に残ったのは乾杯発声時の日本財団笹川会長の挨拶でした。社会的に多大な貢献をなさっている上に、私たちをこんなに歓迎してくださっているにも関わらず、おごり高ぶる様子もなく「私もボランティアの一員です。政府だけですべ







## うえるかむはうす



祐川 郁生

北海道

1998年、北海道札幌市のカトリック札幌司教区に開設された、道内に在住する外国籍の人々への支援施設。開設当初から日本語教室の開催や多文化を背景に持つ「ダブル」の子どもたちの学習支援を行っている。各国の料理や食文化を通じた交流会の開催や各国の祝日にちなんだイベント交流会をも行うほか、外国人が直面する医療、仕事、人権、家庭問題などの相談窓口となっている。

(推薦者：イースタービレッジ・ミンダナオを支える会)

「うえるかむはうす」は外国籍の人々への支援施設の名前というだけではなく、両手を広げて「ようこそ」と外国人を支援する窓口として活動してきたことが認められたことは大きな意義があります。丁度、昨年からスタートした教皇フランシスコが提案された‘Share the Journey’（排除 Zero キャンペーン、直訳は人生の旅を分かち合おう）の「出会いの文化」をすでに「うえるかむはうす」が日々の中で大切にし、外国人のために奔走してきたその実り、その結果が評価に繋がったのだと思いました。また、フィリピンからの信徒宣教師のメリンダさんとエディタさんの永年にわたる北海道での活動が画面一杯に紹介されたことも喜ばしいことでした。2人は今年帰国されましたが、一緒にこの受賞を喜びました。

今回、受賞式典に参加し、日本全国で同様の活動をしている団体の活動を聞く機会を得て大変参考になりました。それぞれの地域性、特殊性による事情は異なるものの、時代の流れに従い活動の仕方も変化がみられます。中でも埼玉県の「ふじみの国際交流センター」では発足（うえるかむはうすの1年前）から21年目を迎え、かつて支援を受けていた外国人が支援する側となってボランティアに来るという話に感銘を受けました。

「うえるかむはうす」の近くには北海道大学があり、外国人留学生、研究者も多く集うというのも特徴ですが、最近では東南アジアから、とくにベトナムからの語学研修生、実習生も増えてきており、そこから生じる様々な困難さにも取り組むようになっています。

ダブルの子どもたちの教育支援は気が付いてみると、多くはすでに大学生、社会人、あるいは母親になっており、日本の学校を卒業し、学習言語も日本語となり、最近では彼らの支援は殆ど必要がありません。日本の児童と同じように学習塾に通うように

なったのは親の生活が安定してきたからでしょうか。

各国の料理や食文化を通じた交流会も北大祭、大通り公園での食のイベントで物珍しさも薄れてきていますが、それが何であれ食を介した交流は、お互いを知るうえでやはり必要不可欠だと思われます。

このような時代の変化の中で外国籍の定住者の支援の内容も日本人が直面するのと同じ人生の問題、医療、仕事、進学、家庭等となってきました。「うえるかむはうす」においてもかつて支援を受けていた側の外国人も一緒になり、共に人生の旅路に希望をもって、恐れず進むというのがこれからの私たちの指針となるようです。Share the Journey と。

「うえるかむはうす」 ボランティアスタッフ 大竹 葉子／西田 あつこ



▲誕生会



▲日本語教室の後で



▲学習支援



▲フィリピン料理



▲子どもたち

## 学校法人 カンティーニョ学園 虹の架け橋教室



愛知県

愛知県豊橋市のブラジル人学校「カンティーニョ学園」が学校運営と共にやっている事業が「虹の架け橋教室」で、日本に定住しながらも、日本の学校になじめず不登校になってしまったり、経済的な理由等で不就学となってしまった外国籍児童に日本語教育を行い公立の学校へ転入させている。日本語がわからない外国人の子どもの公立学校転入に深刻な問題が発生し、2009年に文科省の予算で虹の架け橋教室事業（定住外国人の子どもの就学支援事業）が全国各地で始まったが、2015年にこの事業の運営が地方自治体に委ねられてから、多くの団体が自治体の支援を受けられずに事業継続を断念した。しかし豊橋市では事業の継続を決め、これまでに約400名の生徒が在籍し、約300名が公立の学校へ転入、外国人学校への復帰など、何らかの形で学びの場へ戻っている。

（推薦者：笹原 留似子）

理事長

辻村 浩子

この度は、社会貢献者表彰という大変名誉ある賞をいただき、スタッフ一同心から感謝しております。

表彰式前の懇談会では、今回同じ賞を受賞された方々ともお話できる機会をいただき、ご自身の人生、または命をかけ、社会貢献に尽力されている方がこんなにもたくさんいらっしゃることに感動いたしました。そんな皆様と肩を並べてこの場に立たせていただいたことは、大変光栄なことと嬉しく思いますが、これまで以上に私たちが行っている活動を大切に育てていかなければならないと強く思いました。

私たちの「虹の架け橋教室」は、日本へ働きに来る外国人の親御さんを持った子どもたちが、言葉や習慣の違いで学校へ行けなかったり、経済的な理由でインターナショナルスクールへ行けなくなってしまったときに、日本語や日本の学校の習慣を教え、市役所と連携してスムーズに日本の公立学校へ転入させるのが主な役割です。

私たちの拠点である愛知県豊橋市は、20年以上前から日系南米人（主にブラジル）が多く在住しています。彼らはおもに自動車関連の工場に勤務しており、今や企業にとってはなくてはならない大切な働き手となっています。その日系人の親御さんを持つ子どもたちも当然ながらたくさんいて、この地域ではたくさんのブラジル人学校が存在しており、私共「カンティーニョ学園」もそのひとつです。

しかし、2008年のリーマンショック以降、大勢の外国人が職をなくし、私立で学費の高いブラジル人学校への月謝が払えず学校へ行けなくなってしまった子どもたちがたくさんおりました。大勢の生徒をなくしたブラジル人学校は次々と廃業に追われ、私共カンティーニョ学園も一時は生徒が半分以下になり、いつ倒れてもおかしくない状況に陥りましたが、義務教育期間中にも関わらず学校に行っていない外国籍の子どもがたくさんいる事態を重く見た行政は、2009年に「外国人の子供のための就学支援



事業」という事業を立ち上げました。これは文科省がIOM（国際移住機関）に委託して開始したプロジェクトで、いまの虹の架け橋教室の基になっている事業です。

この事業に私共が採択されたおかげで、当時ブラジル人学校を辞めなければならなかった子どもたちに無料で教育の場を与え、日本の公立学校へ行くという新しい選択肢を作ってあげることができたことは、教育現場のスタッフにとって大変喜ばしいことでした。

昔から外国人がたくさん住んでいる土地柄か、自治体も企業も大変協力的で、ランドセルの寄付、教室の運営のための設備の寄付もたくさんしていただき、地域の皆様に支えられこれまで300人以上の子どもたちが公立学校に転入することができました。

そして今回、このような大きな賞を頂けましたが、これはひとえに、虹の架け橋教室を支えてくださった豊橋市多文化共生国際課の皆様、教育委員会、企業様、そして苦しいときも一緒にごんばってくれた学校スタッフ全員のおかげと強く思います。本当にありがとうございました。



▲ランドセル寄贈



▲警察署訪問



▲薬物乱用防止講座



▲授業風景



▲生徒集合写真2014年

## 青木 義道



滋賀県

滋賀県湖南市立日枝中学校英語教諭。学生時代にブラジルへの留学経験があり、ポルトガル語やスペイン語が話せることから、外国人の割合が4%と高い同市で、教室での授業についていけない外国籍生徒に別室での日本語指導や支援を行っている。また、日本の学校システムに不慣れな外国籍の保護者からの問い合わせを引き受けるほか、家庭訪問や三者懇談会には通訳として担任に同行し、支援を行っている。学校からの配布書類を翻訳してもなかなか読んでもらえないことからImportante！（重要！）というスタンプを考案し、書類に押したところ、抜群の効果を発揮し、全国の研修会で披露したところ「ほしい」という声があがり、全国販売されることになった。この取組を知ったブラジルの国民的漫画家マウリシオ・デ・ソウザ氏が感動し、日本に住む外国籍の子どもたちを支援するための「モニカスタンプ」の取組へと発展することになった。また、地域の人々との国際交流を目的として、成長した教え子たちとともに、ボランティアグループ「カーニョ」を結成し、ポルトガル語講座やスペイン語講座をはじめとする様々な活動を行っている。

(推薦者：大澤 重人)

この度は社会貢献支援財団様より、名誉ある賞をいただき光栄に思いますと共に、心より感謝申し上げます。受賞式では、国内外でご活躍されている多くの方々の活動の一端に触れることができたことも大きな財産となりました。

私は外国籍生徒の数多く在籍する湖南市立日枝中学校で教員をしています。2016年、共に子どもたちへの日本語指導をしているボランティアの友人から、地域でさらなる国際交流をするためにポルトガル語を教えてほしいと頼まれました。私は教え子の日系四世の青年に講師を依頼しました。ブラジルで生まれ日本で育ち、社会人となつてがんばっている彼が適任だと思ったからです。彼は私の申し出を快諾し、3人で「カーニョ」という名のポルトガル語教室を始めました。「カーニョ」とは、ポルトガル語で「優しさ」を意味します。この講座には、地域のボランティアや教員、学生が集うようになりました。こうした仲間と共に、地域の外国人と日本人との身近な国際交流を目標に発足したのが国際交流ボランティアグループ「カーニョ」です。

「カーニョ」では、ポルトガル語講座の他に、スペイン語講座、日本や海外の文化講座、国際交流イベント、在日外国人子弟への学習支援、学校現場や地域社会への講師派遣など様々なボランティア活動を行っています。ブラジルやペルー、日本など、様々な国籍のメンバーが活動をしています。彼らは、日本で言語や文化の壁に苦労しながら生活している子どもたちや保護者のよきモデルとして活躍しています。先輩たちの活動に刺激を受け、前向きにがんばろうとする中高生が少しずつ増えてきていることは大変喜ばしいことです。

日本で生活する外国人はますます増えていくことが予想されます。「カーニョ」



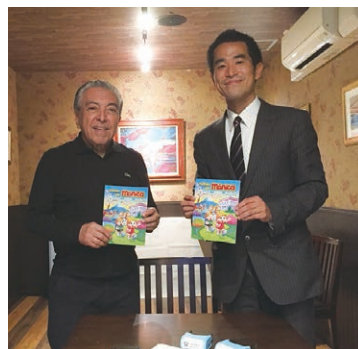
のメンバーのように、国際交流に関心を持ち、日本社会で活躍する様々な国籍の若者が増えてきていることに心からうれしく思います。私たちは、今後も地道な活動を続け、日本と外国との懸け橋となるような子どもたちが多方面で活躍することを願っております。

末尾になりましたが、この場をお借りして日頃私の活動を理解し温かく見守ってくれている家族や友人、共に活動して下さる多くの方々に深甚なる謝意を申し上げます。

この度は誠にありがとうございました。



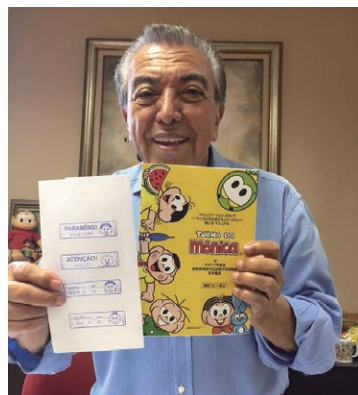
▲「カリニョ」メンバーとボランティアの方々とマウリシオさんを囲んで



▲ブラジルの国民的漫画家マウリシオ・デ・ソウザさんと共に



▲2017年10月滋賀県湖南市「マウリシオさんへの感謝の集い」



▲マウリシオさんの支援を受けて完成した「モニカスタンプ」



▲外国籍生徒へ日本語支援の授業



▲カリニョでのポルトガル語教室



## 社会福祉法人 一粒会 母子生活支援施設 FAH こすもす



千葉県

アジアから来た女性（労働者としてブローカーに來させられた）とその子供（日本人男性との子供）が、男性の暴力や置き去りなどのため行き場がなく困窮している母子のためのシェルター（駆け込み寺）として花崎みさを氏が1991年4月に開設した。その後、1995年に認可を受けて母子寮となって公的支援を受けられるようになり、1998年に現在の母子生活支援施設FAHこすもすとなった。入所してきた母子達は、自立ができるように日本語の習得、日本で暮らすためのルールやマナー、日本の学校教育システムの説明等、教室を開いて教えている。また、法的手続きなどのサポート、専門家のカウンセリング等もあり、母子たちの自立支援を続けている。

（推薦者：中島 健一郎）

理事長・統括施設長  
花崎 みさを

この度の受賞に対し、心から感謝申し上げます。ここにあらためて私共の活動の経緯と内容について報告させていただきます。

1970年代の後半から、インドシナ半島からの難民が日本にも上陸するようになり、私も1981年からベトナム、ラオス難民の子どもたちを自宅に預かり養育することからこの活動を始めました。その後、アジアの子も日本の子も共に住める家作りとして、児童養護施設「野の花の家」を開設しましたが、その頃、ブローカーの仲介によっていわゆる「外国人労働者」と呼ばれる人々が、日本にも多く流入するようになり、特に女性たちは夜の巷で売春や契約不履行などの扱いを受けながら働いていました。そしてそんな女性たちに日本人男性が声をかけ、結婚や同棲という形で地域に住むようになり、言葉も生活習慣もよく解らない中で男性の暴力によって子どもを連れて家を出てくる女性たちが多くいることを知り、彼女たちと子どもたちのためのシェルターを作ったのが1991年のことでした。

資金など全くありませんでしたので、当時、ボランティア活動としてアジア支援をしていた俳優の菅原文太さんのご支援で、建物を建てることができ、日本では全く新しい活動だったこともあり本当に手さぐりで活動を開始しました。それが、シェルター「フレンドシップアジアハウス・こすもす」です。不法滞在や偽装滞在になってしまっている彼女たちのために、個人運営の形でスタートしたのですが、経済的に行き詰ったことと、公費の活用のことを考えて、すでにある社会福祉法人の運営に切り替えたのが1995年で、名称も「FAHこすもす」と改名しました。

「FAHこすもす」の働きは、まず男性から身を隠し、安心安全な生活を保障すること、そして抱えている問題（離婚親権の問題、何よりビザの更新や取得などの身分保

障の問題など)の解決と、その後の自立支援(日本語の習得、就労のための技術的なものの修得、家事、育児、地域生活への支援など)が大きな仕事になります。

母子は一緒に一室で暮らし、母は主にできる人は就労し、子どもは保育園や学校に通いながら前述のような問題解決と自立に向けた準備に取り組んでいます。日常生活では、種々な国の母たちがいるので、時には自国の手作り料理をスタッフや他の母子たちにふるまったりして、国際色豊かな暮らしが展開されています。

この度は推薦者である中島様との出会いのおかげでこのような賞をいただくことができ、大変光栄に思っております。又受賞された方々の活動の内容をあらためて知ることができ、私共も更なる活動のヒントや力をいただくことができました。これらを糧に、更に精進してまいります。

この度は本当にありがとうございました。



▲バスソルト作り体験



▲日本語教室の様子



▲FAH こすもすのスタッフ 理事長を囲んで



▲流しそうめんをしました



▲施設内クリスマス会



▲潮干狩りに行きました

## 広瀬 紀子



NPO 法人ジャポニカアグリ  
代表

愛知県／ベトナム

1996年、大学を卒業した年から口唇口蓋裂治療の医療援助活動に参加し、ベトナムのベンチュエ省グエンデンチュー病院で口唇裂の子どもの無料手術を行い、17年間で約2,000名の子どもの治療に携わるとともに現地の医療者に技術の移転活動を行った。現地では農業支援も必要とのことから、農業に従事するベトナム人の育成や干ばつ時の生活、農業用水用タンクを寄贈するなどベンチュエ省での医療と農業の支援活動や人的交流を続けている。

(推薦者：香月 武志)

私はこれまで約20年、ベトナムへの医療ボランティアの活動を続けて参りました。

昨今、医療活動の重要性と共にベトナム経済の根幹となる農業での支援の必要性を感じ2013年、NPO 法人ジャポニカアグリを設立致しました。この設立趣意にはベトナムの農業指導者を日本へ受け入れ、サポートし国内で農業の知識及び技能の教育を通じて国内外の農業者の人材育成による社会教育の推進、職業能力の開発、日越間の親善関係の増進に寄与する事を目的としました。また、環境の変化によりベトナムでも様々な環境や水害問題も起こっております。その変化に応じて適時サポートも続けております。今年、日本とベトナムは外交関係樹立45周年を迎え天皇皇后両陛下の御臨席を仰ぎつつ、国賓として来日されたクアンベトナム国家主席閣下をお迎えして日越外交関係樹立45周年の記念レセプションも開催されました。ベトナムと日本の関係はさらに近く、深く、確固たる普遍な関係になって参りました。

私自身、日越の橋渡しの一員として様々な角度から時代の変化に合わせた活動も行っていきたいと考えまして、今年、5年ぶりに愛知県でベトナムフェスティバル in 愛知名古屋を開催することが出来ました。日本在住のベトナム人が全国2位である愛知県で開催出来ました事は日本人にベトナムを知ってもらうことはもちろんの事、日本で奮闘する未来への夢に満ち溢れたベトナム人に故郷を思い出してもらうひと時を提供できたことは非常に有意義な時間だったということを多数のベトナム人が来場され、彼らの表情を拝見して実感致しました。

社会貢献表彰に受賞を頂きまして、安倍昭恵会長始め、内館牧子委員長ならびに選考委員の皆様、社会貢献支援財団のスタッフの皆様、日本財団様に心から感謝申し上げます。

凡児徹底、当たり前な事を桁はずれの情熱で行う事をモットーに、コツコツと突っ



走って参りました。恐縮ながらこのような盛大な表彰式にお招きいただき、表彰状を拝読し、「やっとひと息つけるのかなあ、同じ様な志を持った多くの人に会いジーンと心が熱くなり、自分を褒めてあげてもいいのかな」と思いました。

そしてまた新しい課題に向けて、自らを奮い立たせ、前に進めと背中を押していただきました。私は女性ですが男気と笑顔で“人生は挑戦なり”

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

また今回受賞した皆様と社会貢献支援財団様の益々のご発展を祈念しております。



▲トラクターがない地域と聞いてトラクターを寄付



▲愛知に招いて農業指導者の育成



▲干ばつ状況を視察



▲干ばつ状況で水タンクを寄付する事を決めた



▲水タンクを現在までに100世帯に貧困世帯に寄付する



▲診察風景